

連続講座「美術館堆肥化計画」

「趣旨」 農業から地域に根ざした新たなアートの獲得をめざす「青森 EARTH2019：いのち耕す場所 ―農業がひらくアートの未来」展。その関連として「様々な分野の実践者・研究者らを講師に迎えた連続勉強会」を行う本企画では、一貫して芸術を他分野につなげ、拡張していくことが試みられます。ここでは芸術作品を扱う以上、芸術という一分野に終止せざるを得ない美術館や展覧会を、作物を生産する田畑のような生き生きとした場に近づける（＝堆肥化）ことが目指されているのです。

堆肥と化した美術館において何がひらかれるか。田畑では様々なモノが土壌の中で絡まりあい、日々新たな作物が育まれます。ヒエ、ミミズ、リン、カリその他様々な有機物無機物。互いに惹かれ・ぶつかり・混ざりあう中で息づく、作物に似た未生の言葉や実践の数々。それらを美術館に招き入れ、東の間協演の機会を設けることは、生きることとつくることの間で、芸術の根をより大きく大きくすることにつながっています。そうして生態系の中で再起動する芸術においては、米や農にまつわる事象から人と世界の関係を徹底してみつめ、編みなおそうとした青森ゆかりの医師／思想家である安藤昌益(1733-86)の仕事が、最重要となるはず。本企画では芸術家・安藤昌益を知る機会を設定することで、芸術家という職業を人類史の中で再考する機会ともしたいと考えています。

総じて本企画が出演者や参加者の方々と追求したいこと。それは自然・社会・芸術の現在を肥やしに、人が未来を生き延びるための術（アート）をどう培うかを考えることにあります。

- 第1講「落穂ひろい ―安藤昌益ことはじめ」
講師＝石渡博明（安藤昌益の会事務局長）
2019年11月16日（土）10:00 - 12:00
@ ワークショップ A
- 第2講「腐植の自由 ―農作業が培う生のかたち」
講師＝東千茅（農耕者／雑誌『つち式』主宰）、森元斎（哲学者）
2019年11月16日（土）13:30 - 16:30
@ 展示室 E
- 第3講「作物は語る ―昌益村の営みについて」
講師＝山内輝雄（百姓／「昌益村」村長）
2019年11月17日（日）11:00 - 12:00
@ エントランス2周辺等
- 第4講「安藤昌益勉強会 in 青森県美」
講師＝安藤昌益勉強会
2019年11月17日（日）13:30 - 16:30
@ 展示室 E
- 第5講「ミミズの径行き ―飛び地のヴィジオネールII」
講師＝オル太（アーティストコレクティブ／企画展参加作家）、榎木野衣（美術批評家）、山内明美（歴史社会学者）、豊島重之（演出家／故人）
2019年11月30日（土）13:30 - 16:30
@ ワークショップ A 等

○ 自然世論

。自然世轉定與人業行轉定與微在異矣轉定春万物生花咲是與耕田畑藉五穀十種轉定夏万物育盛是與芸耨十種穀令長大轉定秋万物堅剛是與令實十穀收取之轉定冬万物枯藏是與枯十穀壳藏實為來歲種來穀實成為食用轉定又春來生花夏盛秋堅剛冬枯藏是與藉種為芸耨實收取藏在何始之何時在是終真轉定万物生耕道人倫直耕十穀生與行而年始在終轉定人倫一和矣轉定自然也人倫自然也故自然世云（註二）

“自然一つ、救いも詩も大地から湧く。我らの宗教も芸術も、ないしは生活も、ただ真にこの一つの大地から湧き出たものであらしめたい”（註2）

自然の世の論（註3）

土として生き、人として死ぬ。雪交じりの土の下、ほどけていく私のいのち生きて死ぬ、春。田畑を耕し、種を蒔く。花の本性が咲くことにあるように生きて死ぬ、夏。雑草をむしり苗を愛でる。殺すことは生きること生きて死ぬ、秋。実りを収穫する。結ばれていく私たち生きて死ぬ、冬。実りを抱き止め、殖えていくいのち

私たちは ここにいる（それでもなお）
 だらだらと迂回しながら 明日に怖れと希望をにじませながら
 かつて私たちは ミミズだった アザミだった イモリだった
 いま 私たちは 私たちは

石灰質の六畳間 その床に鋤をふるい初穀を蒔く
 充血した臉の裏に どこまでも透明な田圃の畝を現像する
 生きもの全てが集まり、息づく村の幻景

自然は続く（祖父は国鉄を定年退職した後、畑を借りて自分が食べたい作物はなんでも育てた）
 人も又続く（僕はかかとをつけた屈伸ができない）

私は人なり 自然なり

註1 安藤昌益「稿本自然真営道」（東京大学総合図書館所蔵）から該当箇所をデータ化して掲出

註2 江渡秋嶺「土と心とを耕しつつ」（1924）より

註3 安藤昌益が自書「自然真営道」の中で、自ら理想とする自然と社会の関係について言及する「自然ノ世ノ論」を奥脇嵩大（展覧会担当学芸員）が創訳

[各講座の補助線 (のよなもの)]

第1講「落穂ひろい ―安藤昌益ことはじめ」

活字を拾う：活字を組み合わせてつくった版で刷るかつての活版印刷の現場での一般的な作業。

落穂を拾う：「レビ記」(『旧約聖書』)にみられる「落穂拾い」は、農村社会において自らの労働で十分な収穫を得ることのできない寡婦や貧農らが命をつなぐための権利として認められた慣行。フランスの画家ミレーが好んで画題とする。

既存の概念とともに既存の語句を否定し「転定(てんち)」「男女(ひと)」などの新たな語句を編み出した安藤昌益の仕事を、活字や落穂を拾う行為と同等のものとして捉え、万物の生を世界にめぐらすための網の目として考えてみる。

第2講「腐植の自由 ―農作業が培う生のかたち」

17世紀イギリス。清教徒革命に揺れるこの国で「真の水平派(True Levellers)」「耕す人びと(Diggers)」という組織の代表者にジェラード・ウィンスタンリー(Gerrard Winstanley)がいた。「一切の売買、市場は存在してはいけない。地球全体が共有された財産でなければならない」と述べ、また「他人を支配する存在はいてはいけない。ただ自分だけが自分自身の支配者でなくてはならない」と述べたジェラード。その仕事は人間の自由な生のあり方における強烈な発露として、後のアナキズムの到来を準備するものとなった。

21世紀日本。様々な不寛容と分断にまみれるこの国の片隅で、人間以外の家畜や動物、畑の周辺に繁茂する雑草類に至るまで、様々な他種との共生をもとに、自らの生を問い直す実践として、不耕起で自然農を行う人物がいる。東千茅である。自由の獲得(アナキズム)と農作業は「生存権の確保」という一点において確かにつながるところがある。その辺りのことを東氏と農に関心を寄せるアナキストにして哲学者・森元斎氏には語っていただきたい。

第3講「作物は語る ―昌益村の営みについて」

山内輝雄さんが八戸市内の自身の畑を開放してつくられた「昌益村」では、30種くらいの作物が日々育てられている。自分で買ったタネはほとんど植えられていない。いずれも食べて美味しかった作物や、知人友人が持ってきてくれたタネから育てられている。請われればそれらの作物の栽培のコツを嬉々として教えてくださる山内さん。そのひらかれた、共有された畑のあり方は、人の耕作を尊び「直耕」と名付けた昌益の精神につながるとともに、近年世界中の都市部での発達著しい市民が共有してつくられる菜園の動向とも凶らずも一致する。今回は山内さんに自身の「昌益村」での実践を紹介していただくとともに、「直耕」の眼差しでみる、展覧会のポイントについてもお伝えする。

第4講「安藤昌益勉強会 in 青森県美」

安藤昌益というある種の「複雑さ」に向き合う上で、集団性とその中での知識の共有は有効な手段である。これまで読書会やフィールドトリップを様々な重ねる本勉強会を青森県立美術館で開催するにあたり、主導する一人である片岡龍は、そのテーマとして「表現すること」「いま、何が奪われているのか？」を掲げた。当日は展覧会での出品作品や作家の活動例をもとに、昌益の生きた時代と現代の時代背景とを結びあわせ、自由な議論を行う予定である。

第5講「ミミズの径行(みちゆ)き ―飛び地のヴィジオネールⅡ」

2017年に青森県立美術館主催の事業「アグロス・アートプロジェクト 明日の収穫」の一環で開催された農と芸術の関係を問うシンポジウム「〈余地の芸術〉を拓く」の中で、登壇者の一人である豊島重之は自身の講演「飛び地のヴィジオネール」を終えた後の質疑応答でこう述べた。「『飛び地』という言葉には既に飛び地から離反・背離していくことが要素として含まれていると思うんです。(中略)ミミズが土を作っていく。食べて排泄していく。そういうミミズという環形生物がいることで土も生まれていく(中略)。ダンスワーク《蚯蚓・丘を引く》が(1997年から2000年にかけて)開催されたこと、2001年の前年にミミズが出てきた、ということが私にとっては思い返すに値することでした。」

今年、自らが「飛び地」となった豊島重之。地域と世界を複眼的に見渡し、両者を共に稼働させる思想を追求してきたようにみえる彼の仕事について、彼を知る美術評論家や社会学者ら、知らない若いアーティストらが語り、それぞれの活動や表現との接点を見つけること。それは豊島重之という堆土から、地域に根ざした芸術の明日を耕す行為である。

[講師プロフィール]

石渡博明(いしわた・ひろあき) 安藤昌益の会事務局長

1947年神奈川県生まれ。東京教育大学中退。経済協力団体勤務のかたわら安藤昌益研究に携わる。「安藤昌益の会」会報『直耕』等を不定期発行。主な著書に『安藤昌益の世界』(2007/草思社)、『いのちの思想家安藤昌益』(2012/自然食通信社)など。共編著に『安藤昌益全集』(農文協)など。現在、社会福祉法人国際視覚障害者援護協会理事長。

東千茅(あづま・ちがや) 農耕者/雑誌『つち式』主宰

1991年生まれ。2015年に奈良県宇陀市大宇陀に移り住み、稲作や養鶏などをして里山生活を謳歌している。

森元斎(もり・もとなお) 哲学者

1983年東京都生まれ。中央大学文学部卒業。大阪大学大学院人間科学研究科博士課程修了。著書に『具体性の哲学 ホワイトヘッドの知恵・生命・社会への思考』(2015/以文社)、『アナキズム入門』(2017/ちくま新書)等。現在、長崎大学准教授。

山内輝雄(やまうち・てるお) 百姓/「昌益村」村長

1937年八戸市生まれ。八戸市の野菜農家の家に生まれる。三本木農業高校卒業後、八戸市役所勤務。マリエントの初代館長をはじめ、主として市の観光事業に携わる。定年退職後、「健康に生きることを人と共有するため」、「安藤昌益の直耕を実践するため」の農園仕事を本格的に始める。2013年から自身の農園を「昌益村」として活動を継続している。

安藤昌益勉強会

片岡龍(東アジア思想史家/東北大学教授)、木村真喜子(安藤昌益を世界に発信する会)、山内明美(歴史社会学者/宮城教育大学准教授)、日中韓の若者らによる安藤昌益についての無境界勉強会。2018年末から不定期に開催。

オル太(OLTA) アーティストコレクティブ

2009年結成。多摩美術大学絵画学科油画専攻を卒業した6名(井上徹、川村和秀、斉藤隆文、長谷川義朗、メグ忍者、Jang-Chi)による表現集団。メンバーの感性を基点に、インスタレーションやパフォーマンスをとおして、太古と未来、宇宙と土俗をなймаぜにし、人の根源的な欲求や集会的な記憶に迫る作品を展開。2011年「第14回岡本太郎現代芸術賞展」岡本太郎賞受賞。

榎木野衣(さわらぎ・のい) 美術評論家

1962年埼玉県生まれ。主な著書に『日本・現代・美術』(1998/新潮社)、『後美術論』(2015/美術出版社)、『震美術論』(2017/美術出版社)他多数。キュレーションした展覧会に「日本ゼロ年」(1999/水戸芸術館)、「釜山ビエンナーレ2016」(釜山市美術館)ほか。現在、多摩美術大学教授。

山内明美(やまうち・あけみ) 歴史社会学者

宮城県生まれ。近代における東北地方の役割とポジションについて、社会学、歴史学、民俗学の観点を取り入れ、朝鮮半島や台湾など旧植民地も対象地域に含めた”The Rice Nationalism”の研究に取り組む。著書に『こども東北学』(2011/イースト・プレス)。現在、宮城教育大学准教授。

豊島重之(としま・しげゆき) 演出家/故人

1946-2019。八戸市生まれ。主な演出作品に《ダンス・オペラ「san・nai」》(1997/ダンス・バレエ・リセ)、《Ohio/Catastrophe》(2006/シアタートラム)、《Svarbard Vault: Vehicle for Seeds》(2015/青森県立美術館)他多数。主な共著に『飢餓の木』(2010/以文社)、『種差四十四連図』(2013/ICANOF)他多数。2001年より八戸市美術館にてICANOF企画展を2011、12年を除いて毎年開催。